

小学校部会 指導助言の記録

指導助言者	内 容
<p>南九州大学 人間発達学部 宮内孝教授</p>	<p>【よかったところ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 授業には、成立条件はいろいろあるがマネジメントがよかった。太鼓の合図、音楽、個別に積極的に関わりながら指導していた。学級の子供たちが肯定的な人間関係にあり、助け合いや教え合いなど肯定的な人間関係があつてよかった。</li> <li>○ 先生の声のトーンや表情、コミュニケーションがすごくよかった。</li> <li>○ 児童の書く力があつた。普段の他教科での充実。周辺条件が整った授業となつていた。</li> </ul> <p>【内容について】</p> <p>① 日之影町立高野楽小4年が初任者。1980年代は体づくりではなく、体操であつた。体操なので鍛える、体力をつけるのが主。全国的に带状で年間を通して授業することが多かった。その中で、1時間の単元を作つてする珍しいやり方が宮崎県の取り組みである。それが今でも続いている。なぜ、宮崎がこれを行ったかという、体操は体を鍛える大事なもののんだけど、子供たちが動きを高める工夫をしましょう、学びを充実させましょうということでスタート。体操はトレーニングではなくラーニングと言われていた。ラーニングが工夫であり、工夫をすることで中学、高校へと今後につながる。ジムに行かず、自分で考えてトレーニングできる。これがゴール。体づくり運動の究極的な狙いはこれ。</p> <p>② 動きを高めるって難しい。それぞれで【動きを高める】のイメージが違う。マイネルという学者は動きを3つに分けている。【1.やっとかつとできる。2.スムーズにできる。3.どんな状況でもできる。】学生は歩くのが上手。スマホを使いながらも歩ける。第3段階。今日は、縄に合わせて跳ぶことがスムーズにできる状況であつた。この次に、これをどんな状況でもできるように取り組んでいる。まさしく高まっている最中である。状況を変えていくことに視点があり、視点を与えるために道具がある。</p> <p>③ 工夫は何のためにするのか。工夫は目的ではない。あることができるために工夫させる。思考・判断・表現は技能を身に着けるためのもの。例えば、縄を跳びながらボールを投げるのと棒を持ちながら投げられたものをさすのはどちらが難しいか。1最初、2最後、3どちらも同じくらい？動机的には跳ぶので、腕が上に上がるので投げやすい。ただ、タイミングがずれると後ろにいつてしまったりする。ここが難しい。棒は、投げ手が上手だと簡単。投げ手が下手だと難しい。となると、どちらが難しいか分からない。回し手が上手であれば、へたであれば？前提がかわってしまう。縄に入るタイミングは縄がどこに来たら？頭上・目の前・床？倍速になったら？移動する距離が変わったら？「はい」、と声かけしてもはいれない子には？工夫とは難しい、こちらの視点も難しい。</p> <p>④ 動きを高める、高めるために動きを工夫する。宮崎県では4年間研究続けているが、なんとなくこうでいいのかなと思つた部分が、道具を使って運動してうまくいったという授業は子供たちにとってはいい授業ではないか。道具を使うことで意欲がわく。2つ使ったり、何を使ったりと工夫がしやすい。できたときに、こうやったらできた！が子供たちが言えたらそれでいい。間違つていてもいい。自分の思つたことが言えたらいい。この経験が今後生きてくる。個人のコツはみんなのコツにはなかなかならない。一人のコツがみんなのコツになったときに技術になる。</p>